

歯学部を支える方々

知の総和

歯学部事務室長 吉 田 誠 司

令和7年4月より、歯学部事務室長を拝命しました吉田誠司と申します。

今回は、この場をお借りして、あまり知られていないであろう、国立大学を巡る現況について概観しつつ、事務室像について述べたいと思います。

2025年2月、国の中央教育審議会において『我が国の「知の総和」向上の未来像』と題した答申が発出された。答申においては、2040年に、日本の大学進学者が現在の約7割の46万人余りとなる推計も示された。人口減社会を見据え、それでもなお知の基盤を維持するためには、一人一人の能力を引き上げることで、人口が減っても総和とし

ての「知の基盤」は維持できるとの未来像である。

国立大学は、2004年、民間の経営手法の導入を念頭に、護送船団方式からの決別を目指し法人化された。各国立大学が評価を競い合い、国立大学の多様性が広がりつつある今、法人化によって、大学機能のうち、「社会貢献」が国立大学においても強く意識されるようになったのではないか。大学の機能とは、「知を創造・探求し（研究）」、「得た知見を教授し（教育）」、「広く社会へ発信し、社会の発展に寄与する（社会貢献）」ことであり、医歯系ではさらに「診療」機能も担う。法人化以前は、主として研究や診療に注力していたかもしれないが、法人化により国立大学は、ステークホルダーである学生、保護者、地域などの社会との



つながりを意識せざるを得なくなり、広く社会に開かれつつあると考える。法人化によって制定された国立大学法人法第4条では、「各国立大学法人の名称及びその主たる事務所の所在地は、それぞれ別表～（中略）～に掲げるとおりとする。」とあり、新潟大学であれば「新潟」に所在することが定められ、いわば「新潟に根付くこと」が法で規定されているともいえる。

今年（令和7年）、地域に根ざした新潟大学歯学部は、創立60周年を迎え、また、大学院医歯学総合研究科は、来年（令和8年）改組を予定し、新たに大学院医歯保健学研究科となる予定である。人口減社会の中で、持続可能な歯学部であり続けるためには、地域にそして社会に必要とされる歯学部であり続けなければならない。また、知の総和を維持する社会の実現のためには、18歳人口のみならず、地域の社会人の学び直し、つまり大学院教育も今後重要となってくる。

「社会」を空間的に拡大した場合、「地域」から「国」そして「世界」へと、その対象を拡大することができる。新潟大学は、文部科学省令和6年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業

（J-PEAKS）」に採択された。構想では「未来社会の“脳といのち”と“食と健康”のイノベーションを創出する研究拠点」を標榜し、本学部では特に“食と健康”領域において、地域に根ざしながら、ここ新潟から国内外へ研究成果を発信していく。

新潟大学歯学部では、連綿と続く歴史をこれからも紡ぎ、地域との対話を通じて絶えず時代の要請にあった姿に形を変えながら、新潟に必要とされる存在であり続ける。

歯学部事務室においても、上司、部下、同僚、教員、学生、保護者など、関係者との対話を通じて絶えず必要な変化を加え、一人一人の職員の能力を向上することで、事務室としての総和を維持向上し、歯学部に貢献していきたい。

参考文献

吉見俊哉（2021）『大学は何処へー未来への設計』
岩波書店
島一則（2022）『国立大学システムー機能と財政』
東信堂



歯学部へ異動してきて

歯学部事務室総務係 片 桐 菜 那

歯学部総務係の片桐と申します。令和6年10月に工学部学務係から異動して参りました。異動初日はドクターヘリ発着の音の迫力に驚き、これまで勤務した五十嵐キャンパスとの違いを実感したことを覚えています。

総務係での業務は、最初は耳慣れない言葉や初めて触れる内容も多く、右往左往していましたが、歯学部のみなさまの厚いサポートのおかげで、少しずつ慣れてまいりました。

12月から3月までは、一時的に学務係にて、主に大学院関係の業務を担当させていただきました。前部署の工学部で担当していた学部学生に対する業務とは制度や対応の視点が異なり、またも右往左往しましたが、この経験は自分自身の視野を広げるとても良い時間となりました。

この4月からは再び総務係に戻り、主に伝票処

理や謝金、旅行命令など会計業務を担当しております。日々の業務の中で、先生方にメールで確認やご対応をお願いさせていただく場面も多く、お忙しい中お手数をおかけすることに恐縮しておりますが、いつも迅速かつ丁寧にご返信くださり、大変心強く感じております。

さて、仕事から離れたひとときは、愛犬と公園でお散歩&ピクニックをしたり、イベントに出かけたり、一緒にお昼寝をしたりすることが幸せでした。常にそばにいた愛犬は、先日虹の橋を渡ってしまいましたが、今も変わらず大切な存在です。今回の誌面にも、そっと思い出の写真を添えさせていただきます。

まだまだ至らぬ点も多々ございますが、引き続き精進してまいりたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



愛犬「ふぁいん」